

時の流れに 抗いつつ 何時も 元気な由布院 いいで!

地域は舞台 湯布院 自然と文化のまちづくり (大分県田布市)
文 御厨貴 写真 鈴木勝



湯布院 自然と文化のまちづくり
1970年代から、温泉旅館の若主人たちが豊かな自然と文化の香り高いまちづくりに取り組む。牧野を開発から守るために始めた「牛一頭牧場運動」と「牛喰い絶叫大会」、滞在型のリピーターを呼び込む「ゆふいん音楽祭」「湯布院映画祭」「ゆふいん文化・記録映画祭」などを開催。写真は「ゆふいん文化・記録

映画祭」の懇親会。
なお、1955年に由布院町と湯平村が合併して湯布院町が誕生、2005年に挾間町・庄内町と合併して由布市が誕生した。湯布院町の時代に誕生した活動の固有名詞は当時のままとし、地名としては由布院と表記している。
由布院温泉観光協会 www.yufuin.gr.jp

● 由布院は遠きにありて思うもの

由布院は近きにありて思うもの
内なるフロンティアか外なるフロンティアか
果たして二代目の担い手はどちらへむかう
いずれをむこうと由布院よ永遠なれ!



熊本地震と由布院

由布院といえば、地域文化発信の聖地となつて久しい。この四半世紀近く、断続的にこの地を訪れたが、この地の発するオーラに励まされて、いつも元氣回復、やる気になつて帰京した。いや逆にこの地の温泉と共に、自然の香りと恵みにいやされて、ホッと安堵の思いで東京に戻つたこともあつた。「由布院は遠きにありて思うもの」であり、同時に「由布院は近きにありて思うもの」でもあつた。

そんな由布院を今年四月、突然の地

けて来た家屋は、もはや戻らないのだろうか。溝口さんの「玉の湯」には、地震のツメ跡こそ残つていなかったが、激しいゆれによる損壊はやはりあつた。観光客も戻りつつあると皆淡々としている。観光の町にとつて風評被害は、地震そのものよりも、もつと大変な筈だ。でも「遠くにありて思う」由布院は、「近くにありて思う」と、意外にも平静

震が襲つた。熊本地震である。これも本来は熊本・大分地震と命名すべきであつたと思う。果たして由布院はどうなつたか。まず頭を過つたのは、これで二カ月後の「ゆふいん文化・記録映画祭」は中止だということ。それどころじゃないだろうというのが、フツターの考え方だ。「災後」の由布院にどんな声かけをしたらよいか、そんなことばかりを思う日々が続いた。それから二カ月後、六月末に私は何と由布院にいた。旧知の中谷健太郎さんからは亀の井別荘の中谷さんの住まいが、二階崩壊でひどい状態。でも雪の

なのだ。この手強さは何なのだ、と思う。名物の辻馬車も復活しつつあるし、何よりも「第十九回ゆふいん文化・記録映画祭」が敢行されたのだ。これにはびつくり。六月末の三日間、公民館はぎつしりと人で埋まつた。日本全国から何ごともなかつたかのように、「やあ一年ぶり」「元氣ですか」と皆が挨拶をかわしている。「災後」を逆手にとる

研究で有名な中谷吉郎(伯父)の移築された旧宅は無事で、そこで中谷さん、溝口薫平さんの昔語りをじっくりと聞いた。でもと、もう一度思う。中谷さんが長年「若者宿」のように住み続



50余年間由布院のまちづくりをリードしてきた中谷健太郎氏(左)と溝口薫平氏(右)。

という^{まじ}砦を決したような感じはみじんもない。肩の力を抜いたまま、由布院は昨日あつたように今日もあるのだ。「震災から一カ月が過ぎようとしている。町には『元氣』『頑張ろう』の言葉が溢れている。『元氣を出して頑張ろう』というのは、本当に大切なことだと思ふ。でも、この言葉は他人や仲間たちに向けてではなく、実は自分自身に



のどかな田園風景の中を走る辻馬車。



上：ゆふいん文化・記録映画祭受付。長時間映画を観続ける観客のためにお弁当なども販売。下：ほぼ満席の客席。



由布院駅に到着した特急「ゆふ」。同系列で1989年に運転を開始した観光列車「ゆふいんの森」は「D&S列車」(デザイン&ストーリー列車)の嚆矢となった。



ゆふいん文化・記録映画祭の懇親会で、参加者をもてなすのは地元青年団や旅館組合の青年たち。

った。そもそも一九七〇年のゴルフ場建設反対運動を契機にまちづくりはスタートしたのだから。そして三人のヨーロッパ視察道中から、「生活観光地」としての住みよい町というコンセプトが生まれた。

でも時代は田中角栄の「日本列島改造」のテーマの強力な吸引力に引き込まれつつあった。由布院とて例外ではない。開発熱に浮かされる中から、サファリパーク誘致や自衛隊移駐と、まちを二分する争点が続々と投げこまれ



ゆふいん文化・記録映画祭実行委員長の清水聡二氏。



映画祭会場は公民館。ロビーでは毎回、監督らのトークがある。

向けての言葉ではないかと、ふと思う」
 「今の私たちにとって大切なのは、外へ向けて元氣や頑張りを発信することではなく、自分自身やこの町への、内への問い掛けではないだろうか」
 「映画祭」のパンフレットに載った実行委員長・清水聡二さんの言葉だ。正直言って「二代目、ここまでの心境に達したか」と思った。二代目の苦勞を語りあうサントリーの「地域文化の担い手研究会」以来、清水さんと加藤真樹子さんとはつきあいが長いからだ。四半世紀前の清水さん、加藤さんは、初代の中谷さん、溝口さんがあたりまえのように突き進んだ「外なる由布院」の只中であって、どうやったら自らのアイデンティティを確立できるかを悩んでいたように思う。

初代の「物語」

そこで、二代目に先立つ初代の中谷

さん、溝口さんたちのまちづくりの歴史を大急ぎでひも解かねばならない。今年で八二歳になる由布院まちづくりの初代・中谷健太郎、溝口薫平のお二人と早逝された志手康二さんの「由布院三人組」の活躍ぶりを、中谷さん自ら「俺が言い放したものを、薫平さんが役所とかけあつて調整し、人望の篤い康ちゃんが『やるえ』と言ってみんなが動き出す」と生き生きと語っている。「三人組」のリードによって全国に鳴り響くほどに有名になった。一九六〇年代半ばから今日までの半世紀の由布院発展譚は、一つ一つが「物語」を紡ぐかのように面白く味がある。初代は荒野を耕すが如く走り抜けた。政治と闘い政治をまきこみ、時に政治にほんろうされながら、運動の渦の中から、さまざまのアイデアが実現していった。初代のまちづくりの時代背景には「高度成長と開発」のテーマが常にあ

る。実はその最中の一九七五年、大分県中部地震が発生し、風評被害に見舞われた由布院観光は窮地に陥つたのだ。しかし初代はこの逆境を逆手にとって、さらなるまちづくりを進めていく。先の辻馬車もまさにこの時に始まる。やがて「ゆふいん音楽祭」「牛喰い絶叫大会」「湯布院映画祭」などを立て続けに実行に移していく。これによって明らかに「内なる由布院」を「外なる由布院」へと開いていくことになった。それが今に至る由布院の全国化現象につながるのだ。

由布院は小さなまちながら、初代の時代に何でも経験してしまつた。だからちよつとやそつとのことではびくともしない。栄枯盛衰何するものぞの気概にあふれている。中谷さん、溝口さんにとつて、今度の地震も二度目の体験なのだ。ああ、私を感じたこの淡々とした雰囲気は、初代の醸し出す「由

フロンティア」へと難なく開けていく点に魅力があるのだ。知らず知らずの内に「おもてなし」の心が育まれ発展していく。大きなイベント、小さなイベントを、由布院の人々を動員して、ますます可能にしていこう。それだけの貫録と力量が備わっている。そんな彼女に、やはり政治はふさわしくない。民間にあつて由布院のまちづくりを按



由布院温泉観光協会の会長・桑野和泉氏(中央)、同常務理事・太田慎太郎氏(右)と事務局長・生野敬嗣氏。

布院流」に他ならない。では「外なる由布院」を二代目はどう捉えているのだろうか。同じく二代目といつても一様ではない。それこそ中谷さん言うところの「由布院は多面体」を反映して各々が自らの道を模索している。

まちづくりの二代目たち

桑野和泉さん、彼女は溝口薫平さんの長女で「玉の湯」社長を継いでいる。

配する所に、桑野さんの桑野さんたる所以があると思えてならないからだ。さて清水聡二さんに戻ろう。清水さんの「映画祭」のパンフレットの言葉の続きを読む。「いろんなものを失つた、あるいは失いかけた今は、本当に大切なものは何か、そして何を育て、生み出していくかを考え直す時に他ならない」「昔の映像記録の中に、今を生きる人々の暮らしの中に、私たちがここで生き、暮らしを編んでゆく拠り所がたくさん詰まっているはずだ。目を見開いて、五感を震わせ、まっすぐな驚きに出会う、今こそチャンスだ。」

透徹した清水さんの文章の底にあるのは、「外なるフロンティア」を通じて、もう一度由布院の「内なるフロンティア」と向きあおうという姿勢だ。これも二代目にしかありえぬ精神の発露である。中谷さんの下で由布院のまちづくりに関わりながらも、二代目たる

生まれついで由布院の文化を一身に纏った女性だ。それもその筈、溝口さん自身が、先の由布院地震の際のエピソードをこう記している。「長女の桑野和泉は当時、小学五年生。あんな大きな地震にもぐつすり寝たままでした。朝起きて、部屋中に本などが散乱していることにも『飼い猫が暴れて落とした』と思つたそうです。わが子ながら、その大物ぶりにあきれました」

桑野さんは「由布院温泉観光協会会長」を務め、今や由布院という地域文化そのものの牽引役だ。常務理事の太田慎太郎さん、事務局長の生野敬嗣さんとの語らひも、常に前むきで話のタネが付きなない。また飲むほどに楽しい人でもある。いずれは政治への噂がたえぬのも無理からぬことか。桑野さんのまなざしは、自らの「玉の湯」へのきめの細かい手入れから始まつて、由布院の「内なるフロンティア」を「外なる

ことにも、がき、続けた清水さんは、今はるばる来つるものかな、独自の心境に立っている。地域精神医療の仕事について由布院を横からながめる加藤真樹子さんは、もつと辛辣に、その思いを語るかもしれない。

由布院よ永遠なれ

桑野さんの「内なる由布院」から「外なる由布院」へまっすぐ伸びるまなざし、そして清水さんの「外なる由布院」から「内なる由布院」へ迂回しながらたどるまなざし、いずれもが独特の二代目由布院「流」を編み出している。それこそ一見この真反対に見える方向性が、いかに交差しながら展開していくのか、由布院の今後のまちづくりを暗示しているように見える。

清水さん、加藤さんを始め、松阪の坂梨律子さん、富山の舟本幸人さんらと共に歩んだ「地域文化の担い手研究



由布院駅の正面に見える由布岳。



朝霧の底に沈む由布院盆地。右手が由布岳。6月に朝霧が見られることはめったにないという。

会」を一応しめくくった折の二〇〇一年の報告書に、私は由布院の二代目に対して次のように書いているのを、発見した。

「世代を越えてというような、あるいは役割の意識という問題はもうあまり考えなくてもいいのではないか、上の世代から見ると、次の世代は何となく個人主義的かなと思われているのだが、もう一度、個人でスタートするというのがこれからの在り方なのかというの、見えてきた。松阪や八日市の場合とは違うが、由布院の場合は、もう一度個人からスタートするということが、多分由布院の許容範囲の中で出来るのではないか。だから由布院ではもう世代論を言う必要はあまりないのではないか」

今からみると一知半解の結びである。実に赤面の思いがする。ただ「個人主義」をくり返している点に、十五

年前の私の立ち位置があったように思う。しかしその後の地域文化の二代目の担い手たちは、決して私がこだわった「個人主義」に回収されるような人生を歩んではない。さらに「個人主義」からスタートするから「世代論」が必要なのではない、「個人主義」であろうとなかろうと、「内なるフロンティア」そして「外なるフロンティア」のせめぎ合いの中に、二代目は否応もなく投げ出されてしまう運命にある。そして濃淡の差こそあれ、「世代論」を真正面からうけとめない限り、一歩も歩み出すことが出来ない。これが今再びの当座の私の結論に他ならない。

由布院の初代からは、永遠のロマンと楽観主義を、そして二代目からは、つかず離れずの精神と内外への目くばりを、学んだ。「由布院よ、永遠なれ」と、彼の地の湯船の中で手足を伸ばしながら、そつとささやきたい。